ドーピングの誘発要因に対する エリートアスリートの認識に関する質的研究

日比野 幹生¹⁾ 舟橋 弘晃²⁾ 石井 隆憲¹⁾

HIBINO Mikio¹, FUNAHASHI Hiroaki² and ISHII Takanori¹: A qualitative study on perceptions of doping induction factors among elite athletes. Japan J. Phys. Educ. Hlth. Sport Sci.

Abstract: Understanding the causes of doping behavior in athletes has been a core research topic in the anti-doping literature. The present study was an attempt to qualitatively explore perceptions of factors that influence athletes and prompt them to take part in doping. The subjects were 12 Japanese elite athletes and a thematic approach was used to analyze the data obtained from a semi-structured interview. Three main factors were revealed: personal, socio-environmental, and situational. The perceived personal factor comprised 3 sub-themes: ‘immoral stance’, ‘extrinsic motivation’, and ‘ego orientation’. The perceived socio-environmental factor comprised 9 sub-themes, including ‘entourage’, ‘doping by other athletes’, ‘social norms’, etc. The perceived situational factor comprised 6 sub-themes, including ‘important competition’, ‘performance decline’, ‘injury’, etc. Several interactions between these factors were observed, suggesting directions for future research. These findings will be of help for developing evidence-based preventive measures against doping.

Key words : performance enhancing drugs, elite sport, anti-doping, thematic analysis

キーワード : パフォーマンス向上薬, エリートスポーツ, アンチ・ドーピング, テーマ分析法

I 緒言

近年, 多くの先進国ではオリンピック競技大会をはじめとする国際競技大会に向けた国際競技力向上が推進されている。国際競技力向上は競技者自身のテーマから国家的な関心事になっており, 国家間のメダル獲得レースは多額の投資を伴った激しい国際競争を巻き起こしている (De Bosscher et al., 2008)。この現象は超大国間の軍拡競争に例えて「グローバル・スポーツ軍拡競争」とも呼ばれている。我が国でも国定のスポーツ基本計画の下メダル量産に向けて多額の国費が投資されるといった軍拡傾向がみられ (Funahashi et al., 2014), 2020 年東京オリンピック競技大会 (以下「東京

大会」と略す) を控える中, さらにこの傾向は強くなる公算が高いと考えられる。

国際競技力向上の積極的な推進は, アスリートのドーピング・リスクを高める可能性がある。競技スポーツは無限の勝利コードによってアスリートの身体酷使という危険を伴う本質を持っている。一方, 国際競技力向上は様々な支援が必要であり, 特に財政的支援は不可欠である。しかし, 競技スポーツの財政依存が増加するとその分マスメディア, 経済, 政治といった取り巻きからの諸要求も大きくなり, 勝利コードの絶対化はますます進みアスリートの身体は限界に達する。この時にドーピングが起こる可能性が高まると言われている (ベッテ・シマンク, 2001)。ドーピング・リスクを最小化することは国際競技力向上政策の

1) 日本体育大学スポーツマネジメント学部
〒227-0033 神奈川県横浜市青葉区鴨志田町1221-1
2) 早稲田大学スポーツ科学学術院
〒202-0021 東京都西東京市東伏見3-4-1
連絡先 日比野幹生

1. Faculty of Sport Management, Nippon Sport Science University
1221-1, Kamoshida-cho, Aoba-ku, Yokohama, Kanagawa 227-0033
2. Faculty of Sport Sciences, Waseda University
3-4-1, Higashifushimi, Nishitokyo, Tokyo 202-0021
Corresponding author hibino@nittai.ac.jp

持続可能性のためにも不可欠であり重要な研究テーマである (Funahashi et al., 2015)。

諸外国ではアンチ・ドーピング方策の立案のために、なぜアスリートはドーピングを行うのかと言った研究が行われてきた (ベッテ・シマンク, 2001; Donovan et al., 2002; Gucciardi et al., 2011; Jalleh et al., 2014; Strelan and Boeckmann, 2006; ヴォディングトン・スミス, 2014)。とりわけ、ドーピングの誘発要因を特定する研究は当該研究の中核を成すものである。当該研究は、ジュニア、ナショナル、エリートの各レベルのアスリートを対象として、英国、ドイツ、ノルウェー、デンマーク、スイス、オーストラリアなどの数多くの国・地域で行われてきた (詳細は後述)。しかし、アジア、アフリカ、南米などにおける研究の蓄積は十分とは言えず、当該研究においては地理的・文化的な違いを考慮した研究が求められている (Morente-Sánchez and Zabala, 2013)。前述のとおり、我が国では東京大会を控えてドーピング・リスクが高まっている可能性がある。しかし、我が国ではいずれのレベルのアスリートを対象とした当該研究も希少であり、このうちエリートアスリートに直接アプローチした研究は未着手である。したがって、我が国におけるドーピングの誘発要因に関する研究の推進は喫緊の課題であると考えられる。

以上を踏まえて、本論では我が国のアスリートが認識しているドーピング誘発要因を明らかにする。

II 先行研究の検討

ドーピングの誘発要因を特定する研究については Berbecaru et al., (2014) の研究を参照すれば、個人的要因、社会環境的要因、状況的要因に大別できる。個人的要因としては、禁止物質等の使用を道徳面から捉えた「個人の (低い) 道徳心」 (Gucciardi et al., 2011, Jalleh et al., 2014)、男性は女性よりドーピングに肯定的であると言った性質に起因する「男性ジェンダー」 (Kondric, et al. 2013; Overbye et al., 2013; Pitsch and Emrich, 2011)、

低い自尊心及びインテグリティ等による「危険な個性」 (Petróczi and Aidman, 2008)、競技スポーツの動機づけとして「外発的動機づけ」「自我志向性」 (Allen et al., 2015; Chantal et al., 2009) などと言った要因が明らかにされている。

社会環境的要因としては、競技スポーツがスポーツビジネスとの関連で発展してきた経緯からスポンサーとの契約金や賞金と言った「経済的報酬」 (Bloodworth and McNamee, 2010; Chan et al., 2014; Overbye et al., 2013)、アスリートは様々な人々と関係を持ち競技スポーツ活動を行っているため、「指導者」「ドクター」「親」などのアスリートを取り巻く関係者 (Bloodworth and McNamee, 2010; Chan et al., 2014; Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010) やアスリートの「競争相手のドーピング」 (Breivik, 1992; Haugen, 2004) と言った要因が明らかにされている。このほか、「ドーピング検査の不足」 (Chan et al., 2014; Mazanov and Huybers, 2010; Overbye et al., 2013)、禁止物質等の使用に直接関連する「禁止物質等の入手可能性」 (Overbye et al., 2013; Chan et al., 2014) や「サプリメント摂取の慣習」 (Backhouse et al., 2013; Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010) など要因として明らかにされている。

状況的要因としては、競技スポーツでは常に高い競技成績が求められるため、パフォーマンス向上の必要に関連する「重要な競技大会」 (Berbecaru et al., 2014; Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010)、「損傷」 (Aubel and Ohl, 2014; Bloodworth and McNamee, 2010; Chan et al., 2014; Hauw and Mohamed, 2015; Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010; Overbye et al., 2013)、「パフォーマンスの停滞」 (Overbye et al., 2013)、「不安定なトレーニング支援」 (Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010; Mazanov et al., 2011)、「減量」 (Overbye et al., 2013)、「筋肉量の増加」 (Chan et al., 2014; Overbye et al., 2013) などと言った状況が要因として明らかにされている。一方、国内の研究に目を向けると、ドーピングの誘発要因に関する研究は希少である。一部に経済的報酬等が要因であるとの指摘をした研究 (大野, 1996) がみられる程

度である。我が国で起きているドーピングは、多くが意図的ではないドーピング、いわゆるうっかりドーピングであるとの見解（浅川，2011）から当該分野の研究は積極的には行われてこなかったと考えられる。しかし、先般我が国ではカヌー競技においてパラドーピングが起きている（日本アンチ・ドーピング機構，2017）。このようなドーピングは、何らかの要因によって追い詰められたアスリートがいたと言う事実を示している。ドーピングの未然防止という観点からは、事前にドーピングが起きる可能性を捉えて必要な対策を講じるといった対応が重要である。このためには、我が国のアスリートが認識しているドーピング誘発要因を特定することは急務である。

III 研究方法

1. 研究デザイン

先行研究では前述のとおり複数のドーピング誘発要因が識別されてきた。実際のドーピングは、これら複数の要因が複雑に影響して起きていると考えられている（ベッテ・シマンク，2001；Erickson et al., 2015）。先行研究では、このような複雑で多重的な背景を持つ現象の理解を目指す研究課題には質的研究法が適しているとされている（リチャーズ・モース，2008）。ドーピングは違反行為であり、諸外国では法律で罰則規程を設けている国もある。本調査の内容には、対象者にとってナイーブな案件も含まれているとともに、ドーピングに対する質問は個人の心理の深層部分にも触れる。このような内容は、質問紙調査によるデータ収集及び分析では困難であり、インタビューをベースとした質的研究法が適していると考えられる。前述のとおり、ドーピング誘発要因には未だ識別されていない要因が存在している可能性があるとともに、我が国のドーピング誘発要因に関する研究成果の蓄積は乏しい現状にあるため、本研究では探索的に当該要因を明らかにしていく必要がある。したがって、本研究では既知の理解では不十分な領域を理解しようとする場合に適している（リチャーズ・モース，2008）とされている

質的研究法が有効であると考えられる。

以上を踏まえて、本論では、ドーピング誘発要因を明らかにするために質的研究法を援用した。

2. 調査対象

本研究では、研究課題に関する豊富な情報を収集できる一定の選択基準を設定したうえで対象者を選定する目的のサンプリング（メリアム，2004）を以下のように行った。対象者は、世界アンチ・ドーピング規程が適用となった2004年8月以降のオリンピック競技大会をはじめとする国際競技大会に日本代表として出場経験のあるアスリートとした。対象となるアスリートの数は12人とした。Guest et al.（2006）の研究では6人目のインタビューで全体の73%のコードが、12人目までで92%のコードが含まれていると報告されている。このため、質的研究法におけるインタビューでは12人でテーマは抽出できると判断されており、Guest et al.（2006）の研究成果は国際的にも支持され質的研究法で活用されてきた。対象競技は、オリンピック競技の個人競技及び集団競技とした。この結果、個人競技の男性5名・女性5名、集団競技の男性1名・女性1名のアスリートが対象者となった^{注1)}。（表1）

これらの対象者は、世界中の高い競技レベルのアスリートが表彰台を目指すオリンピック競技において、世界アンチ・ドーピング規程のドーピング・コントロールのもとで国際競争を行い一定のドーピング・リスクのある競技活動を経験してきたことから、ドーピング誘発要因に関連する豊富な情報の収集が期待できると考えた。

3. データ収集

データは、1対1の半構造化インタビューを実施して収集した。インタビューの実施にあたっては、Erickson et al.（2015）のインタビューガイドを参照して、①スポーツキャリア、②アスリートライフ、③アントラージュ、④アンチ・ドーピング教育、⑤禁止物質・方法との関係、⑥その他禁止薬物・方法の使用に影響している要因の各セクションで構成されるインタビューガイドを作成し

た。インタビューは、各セクションの内容について実態を把握するとともに、対象者がこれまでの経験を通してドーピング誘発要因をどのように認識しているのかを聴取する方法とした。

作成したインタビューガイドについては、国際競技大会の出場経験者2人に対して予備調査を実施した。予備調査では対象者から本研究の目的に即した一定の発言は得られたが、研究目的等を事前に説明したにも関わらず、対象者が自身のドーピングの有無を尋ねられているとの誤解からインタビューを円滑に実施できない場面があった。以上を踏まえて、本研究では、社会的望ましさをできる限り排除するために、以下の点に留意した。本調査は、第1に対象者がドーピングをしたか否かを把握する調査ではない。第2にドーピングについて葛藤が生じた経験やドーピングのリスクになり得ると考えられる要因を調査対象とする。第3に匿名の確保には十分に配慮する。以上の点を事前に研究の背景と目的、研究方法、研究参加は任意である等の説明とともに、強調して説明しインフォームドコンセントを得ると言う手法とした。

インタビューの実施にあたっては、冒頭は一般的な事項から入りインタビューの流れを大事にしながらできる限り対象者が自分から発言するように配慮した。インタビューの前には、対象者に対

して前述のとおり必要事項（留意点を含む）の説明を行いインフォームドコンセントを得た。インタビューは1人に対して1回、1人当たり平均約69分間（計829分間）実施した。インタビューの内容は、ボイスレコーダーにより音声を記録した。

4. 分析方法

分析は、対象者の記録した音声の文字起こしを行い、質的データの分析ソフトウェアであるMAXQDA2018を使用してテーマ分析法（Braun and Clarke, 2006）により実施した。

本研究では、インタビュー・データから関連した意味単位を抽出し、ドーピング誘発要因を明らかにしようとしている。テーマ分析法は、Braun and Clarke (2006)によって、分析手法の特徴、利点、注意点、プロセスなどの詳細が明らかにされている。特に、テーマ分析法の利点としては、①大量データを要約して有効にできる、②予期しない洞察を生成できる、③心理学的な解釈だけではなく社会的な解釈を考慮できる、④政策立案に適した質的分析に有効であると言ったことなどが示されている。本研究では新たな要因を抽出するとともに、個人的要因のほか社会環境的要因なども対象とする。加えて、本研究の成果はアンチ・ドーピング方策の立案・実施への活用が考慮されている。以上から、本研究にとってテーマ分析法は最適の分析手法と考えた。

テーマ分析法のプロセスは、Braun and Clarke (2006) が示す6つのフェーズにより、帰納的アプローチと演繹的アプローチを併用して実施した。まず第1フェーズでは、録音した音声から逐語録を作成して繰り返し読み込んだ。次に第2フェーズでは、まず分析テーマであるアスリートが認識しているドーピングの誘発要因に関連する意味単位を識別し、続いて先行研究での要因に関連する意味単位を探索した。この時点では先行研究で識別されている要因に関連する意味単位と本研究でのみ識別された意味単位とが確認された。その後、この意味単位を対象者の言葉をできる限り使用して要約（コード）した。第3フェーズでは、

表1 対象者及びインタビュー調査の概要

対象者	競技	性別	実施時期	時間
A	個人競技	男性	2018年8月	76分間
B	個人競技	男性	2018年6月	81分間
C	個人競技	男性	2018年7月	83分間
D	個人競技	男性	2018年7月	67分間
E	個人競技	男性	2018年8月	50分間
F	集団競技	男性	2018年7月	46分間
G	個人競技	女性	2018年7月	77分間
H	個人競技	女性	2018年8月	78分間
I	個人競技	女性	2018年7月	74分間
J	個人競技	女性	2018年7月	71分間
K	個人競技	女性	2018年10月	78分間
L	集団競技	女性	2018年8月	72分間
平均				69分間

コードを類似する内容ごとに集約しサブテーマとして分類し、その後サブテーマについても類似する内容ごとに集約しメインテーマとして分類した。当該メインテーマは各々の性質から、さらに先行研究での要因の大別を参照して個人的要因、社会環境的要因、状況的要因に分類を行った。本研究では、①アスリートの性格や動機づけなどの個人の心理特性に関する要因を個人的要因、②アスリートに影響を与える組織、制度、慣習などの社会的諸条件に関する要因を社会環境的要因、③アスリートが高い競技成績のために通常ではないパフォーマンス向上や身体改变を必要としている状況に関する要因を状況的要因と定義した。次に第4フェーズでは、各メインテーマに含まれる意味単位を読み直し、メインテーマ内の意味単位が類似性を持ち、メインテーマ間では識別可能な差異があるかどうかを確認した。この時点では、メインテーマから除去された意味単位と、別のメインテーマに集約された意味単位があった。次に第5フェーズでは、メインテーマを明確に定義し最終的なメインテーマ及びサブテーマのネーミングを行った。この時点ではネーミングについて再検討し修正したメインテーマ及びサブテーマがあった。第6フェーズでは、最終的に要因の大別、メインテーマ、サブテーマ、意味単位の要約（コード）の一覧表を作成するとともに、分析結果を記述した。以上の6つのフェーズによる分析は、まず1人の著者により行い、第2フェーズ以降のコード作成、テーマ分類、ネーミング等については質的分析の経験がある2人の著者により確認された。その後、著者以外の質的分析の経験がある研究者2人によって、前述と同様のプロセスを検証した。

5. 倫理的配慮

本研究は、対象者の人権及び尊厳を重んじ、個人情報保護に留意する必要があるため、日本体育大学「人を対象とする研究に関する倫理規程」に基づき、「人を対象とする研究に関する審査委員会」による審査を受け承認を得た研究（番号：018-H006）である。

IV 結果

本研究では、アスリートが認識しているドーピング誘発要因を分析テーマとし、アスリートのドーピングを誘発する可能性に関連している意味単位を識別し分析した。この結果、本研究の対象となる714の意味単位が抽出された。これらの意味単位は43のサブテーマに集約され、さらに18のメインテーマに分類された。メインテーマは、要因の性質から個人的要因、社会環境的要因、状況的要因に分類された。（表2）

本研究では、メインテーマを【】内、サブテーマを『』内に示す。

1. 個人的要因

【個人の非道徳的スタンス】は、アスリートが意図的に禁止行為を行うと言った非道徳的スタンスに関連する意味単位が識別・集約された『個人の非道徳的スタンス』で構成された。本テーマにはWADA禁止表国際基準に規定されている禁止物質の使用についての意味単位が含まれている。

【外発的動機づけ】は外的な要因や義務的な要因に動機づけられた競技活動によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『報酬に動機づけられた競技活動』、『義務的に動機づけられた競技活動』で構成された。

【自我志向性】は勝利や他者との優劣にこだわることによるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『勝利だけを求める姿勢』『優劣を求める姿勢』で構成された。

2. 社会環境的要因

【アントラージュ】は、指導者、競技団体関係者、所属先関係者、親と言ったアスリートと直接関係を有する者によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『指導者等のアンチ・ドーピング意識の低さ』『絶対的服従関係』『指導者にかかるプレッシャー』、『指導者の言動』『NF・所属先関係者にかかるプレッシャー』『NF・所属先関係者の言動』『親の言動』で構成された。なお、

『指導者の言動』『NF・所属先関係者の言動』には、実際の指導者や競技団体・所属先関係者によるリスクのある言動が含まれている。

【他のアスリートのドーピング】は、ドーピングの疑いのあるまたはドーピングを行っているアスリートによるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『ドーピングが疑われるアスリートとの遭遇』『競争相手のドーピング』『ドーピングの薦め』『海外長期滞在』で構成された。なお、『ドーピングの薦め』には諸外国のアスリートから我が国のアスリートが実際にドーピングを薦められたと言う事実も含まれている。

【競技成績のインセンティブ制度】は、報奨金や地位の付与制度によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『高額な報奨金の付与制度』『地位・優遇措置の付与制度』で構成された。

【アスリート教育の不備】は、アスリート教育が不備であることによるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『アンチ・ドーピング教育の不備』『アスリートライフ教育の不備』で構成された。本テーマは、当該事項に関連する多くの意味単位の識別・集約により抽出されている。

【ドーピング検査の限界】は、ドーピング検査の限界によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『ドーピング検査の対象にならない可能性』『摘発されないアスリート』で構成された。本テーマには、アスリートのドーピングに関する実際の葛藤に関連する意味単位が含まれている。

【社会規範】は、アスリートに対する社会規範の影響によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『本質を伴わない規則遵守』『集団主義』で構成された。

【不安を抱かせる競技スポーツシステム】は、アスリートに不安を抱かせる競技スポーツシステムによるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『競技成績のノルマ』『ジュニアからの競技中心の生活』『不安定なキャリア』『日常的な疲労回復の必要性』で構成された。本テ

マには、アスリートのトップの時期だけではなくジュニアの時期、引退間際などのアスリートライフ全般にわたる意味単位が多数識別・集約されている。

【禁止物質等の乏少な情報】は、アスリートの禁止物質・方法の情報の不確かさや不足によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『禁止物質等の不確かな情報』『禁止物質等の副作用の知識の不足』で構成された。

【サプリメント摂取の慣習】は、サプリメントへの依存によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『ジュニア期からのサプリメントの摂取』『サプリメントのパフォーマンス向上を目的とした摂取』で構成された。『サプリメントのパフォーマンス向上を目的とした摂取』については、実際にサプリメントがパフォーマンス向上のために使用されている事実も含まれている。

3. 状況的要因

【重要な競技大会】は、アスリートにとって重要な競技大会でのプレッシャーによるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『国際競技大会代表予選会でのプレッシャー』『2度目以降の国際競技大会へのチャレンジ』『競技会での外部からの過剰なプレッシャー』『試合出場の争い』で構成された。

【パフォーマンスの停滞・低下】は、アスリートのパフォーマンスの停滞や低下によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『パフォーマンスの停滞』『パフォーマンスの低下』で構成された。本テーマは、当該事項に関連する多くの意味単位の識別・集約により抽出されている。

【トレーニング支援の低下】は、アスリートへのトレーニング支援の低下によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『トレーニング支援の低下』で構成された。

【損傷】は、アスリートの競技活動における損傷によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『損傷からの早期復帰』

表 2-1 テーマ及び意味単位の要約（コード）等一覧

	メインテーマ	サブテーマ	意味単位の要約（コード）の例	発言者	コード数	発言者数
個人的要因	個人の非道徳的スタンス	個人の非道徳的スタンス	禁止物質が入っていることを知りながら大学生でも使っている	C	6	3
			効果のある禁止物質が入っている外国産サプリメントがうわさになりみんなが試している	C		
			実際に○○競技では意図的な違反行為が起きている	B		
			禁止物質が入っている○○薬を違反と知りながら使用したことがある	E		
	外発的動機づけ	報酬に動機づけられた競技活動	禁止物質が入っているものを実際に一定期間使っていた者を知っている	C	22	8
			報酬や地位がかかった時というのは手を出すリスクが高い	B		
			お金をもらうためにだけ競技するアスリートがいたらリスクは高くなる	C		
			何々をしたいから好成績をだしたいとなると使ってもという気持ちになる	G		
	自我志向性	義務的に動機づけられた競技活動	お金のために競技をするようになるとやっぱり汚いところがでてる	I	8	5
			スポーツで勝って金をもらうビジネスと割り切っているとドーピングのリスクはある	D		
			何かがかかって勝たなければならないとなると危険	B		
			何をしたいからしなければならないに変わってくるのも原因の1つかもしれない	A		
社会環境的要因	勝利だけを求める姿勢	勝利だけを求める姿勢	モチベーションがなくなったのにやり続けなければならないのは厳しい	H	10	8
			誰かにノルマを決められたら競技自体を何のためにするのが変わってしまうので良くない	L		
			周りからのプレッシャーで好きでやっていた競技が義務みだりになるのは良くない	J		
			何が何でも勝つという考えを持たせようとドーピングの原因になる	E		
	優劣を求める姿勢	優劣を求める姿勢	勝ち方はどうでもいいといったようなやり方は危険	B	7	5
			何をやってもいいから勝てといった結果主義は危険	F		
			人をけり落してでもとか汚い野心だとドーピングに手を染めてしまうかもしれない	C		
			勝つことだけがアイデンティティになることは危ない	D		
	指導者等のアンチ・ドーピング意識の低さ	指導者等のアンチ・ドーピング意識の低さ	自分の活躍をみせつけるために競技をするアスリートがいたらリスクになると思う	C	13	7
			競技結果をだして有名になるためにドーピングをしてしまうこともあるかもしれない	J		
			名声のためにメダリストになることを目指していたらそこまで考えるかもしれない	G		
			負けるぐらいなら試合に出たくないという考えのまま上がったら危険	D		
	絶対的服従関係	絶対的服従関係	メダルを取ったら偉いだけでは競技をする意味をみつけられない	H	19	9
			アンチ・ドーピング意識が低い指導者からの指示もあり得る	D		
			アンチ・ドーピング意識が希薄な指導者は危ない	I		
			指導者のアンチ・ドーピング意識が低いのは問題外	K		
	指導者にかかるプレッシャー	指導者にかかるプレッシャー	指導者はアンチ・ドーピングに重要なフェアプレイ精神がないとなると資格がない	J	14	8
			指導者自身がフェアプレイ精神やアンチ・ドーピング意識が薄いのは危ない	E		
			指導者と絶対的な関係だと結果を求められるなど追い詰められた時に危険	D		
			指導者に嫌とは言えない関係は注意するべき	I		
	指導者の言動	指導者の言動	指導者が怖くて断りづらいのは危険	G	21	10
			指導者から言われることを全て信じては危険	J		
			暴力まがいな指導を受けていると指導者が言ったことに従うしかなくなるので危ない	K		
			監督には相当のプレッシャーがある	B		
	NF・所属先関係にかかるプレッシャー	NF・所属先関係にかかるプレッシャー	報酬を得ている指導者はプレッシャーがある	E	6	3
			指導者もアスリートと同じくらいリスクのある環境にいる	G		
			指導者はNFからプレッシャーをかけられていると言ってくる	J		
			優勝というプレッシャーが上から指導者などにかかると思う	L		
	親の言動	親の言動	自分の○○種目は指導者などに薦められるケースが多い	A	14	7
			指導者にもプレッシャーがあるのでそこからアスリートに提供してしまうこともある	E		
			指導者のプレッシャーがあるからアスリートに薦めるリスクがある	J		
			指導者自身が同じでNFから指導者にかかるプレッシャーがアスリートに影響してしまうこともある	K		
他のアスリートのドーピング	ドーピングが疑われるアスリートとの遭遇	ドーピングが疑われるアスリートとの遭遇	追い詰められた指導者だったら自分がドーピングするわけではないのであり得るかもしれない	D	15	8
			NF関係者はアスリート以上にプレッシャーがある場合もある	D		
			NFには2020があるから余計メダルのプレッシャーがかかっている	J		
			NFには他のNFと比べられることからのプレッシャーがある	D		
	競争相手のドーピング	競争相手のドーピング	○○連盟はいつも金メダル獲得のプレッシャーがかかる	K	17	7
			NF関係者がこのくらいしいといけないぞとか逆効果なことを言うのは良くない	J		
			NF関係者が報酬や地位のためにやることはアスリートに影響する	F		
			上が掲げた目標はNFから下に降りて最後はアスリートになる	D		
	ドーピングの薦め	ドーピングの薦め	NFからはアスリートにするべきでない間違っている声かけがある	K	13	8
			所属先の偉い人から薦められたらいいものだと思ってしまう	K		
			所属先のオーナーはプレッシャーになった	G		
			親からのプレッシャーもリスクになり得る	G		
	その他のアスリート	その他のアスリート	親の教えは大事だからプログラムが必要	K	4	2
			当たり前ではない親もいるかもしれないので気をつけなといけ	K		
			薬を使用する方向を考えるような親がいたら危ない	K		
			ドーピングしている外国のアスリートは危ない	F		
	その他のアスリート	その他のアスリート	ドーピングしているアスリートに接する機会が多く人ごとではない	C	15	8
			女子なのに男子みだいな筋肉している外国人アスリートがいる	G		
			○○競技はみるからにドーピングしてそうなアスリートが多い	I		
			国際大会の更衣室で注射器が落ちているのをみた	J		
	その他のアスリート	その他のアスリート	ライバルのドーピングはリスクになる	J	17	7
			ライバルのドーピングがわかったらリスクが高まる	F		
			ドーピングしている相手と同じレベルに立ちたいと思うアスリートもいる	H		
			相手がドーピングしているから自分もしていいということはあるかもしれない	B		
	その他のアスリート	その他のアスリート	相手のアスリートがドーピングしててばれていなければ可能性がある	G	13	8
			外国のアスリートは仲良くなるとドーピングのことを教えてくれる	D		
			他国のアスリートなどと個人的に仲良くなるとドーピングを薦められることもある	C		
			外国人アスリートの友達から薦められた	I		
	その他のアスリート	その他のアスリート	外国のアスリートに日本人はドーピングしないから弱いと言われた	J	13	8
			○○競技では外国の合宿に行って薦められた者で出場停止になった例がある	I		

表 2-2 テーマ及び意味単位の要約（コード）等一覧

メインテーマ	サブテーマ	意味単位の要約（コード）の例	発言者	コード数	発言者数
社会環境的要因	他のアスリートのドーピング	他国の指導者に個人的に指導を受けに行ってきたらおかしくなったアスリートがいる	C	12	9
		海外の長期滞在はリスクになる	E		
		海外で外国人と気軽に話ができるというのは大きな要因になる	A		
		若いアスリートは海外でのトレーニングなどでは気をつけるべき	I		
		海外のリーグは緩そうなので移籍したら注意が必要	L		
	競技成績のインセンティブ制度	競技力向上にお金を絡ませているけれどそれは同時にドーピングのリスクも高めている	D	18	10
		高額な報奨金制度のようにお金が絡んだらドーピングしてしまってもおかしくない	B		
		高額な賞金で成績結果は上がるけど人をけり落してでもとなると手を染める人がでてくる	C		
		高額な報奨金を出し過ぎるとドーピングが起きる	K		
		高額の賞金などは目標にはなるけれど間違えた方向に行ってしまう危険性もある	L		
	地位・優遇措置の付与制度	勝ったら名誉みたいないい話が本当にあつたらそういうことにもなってくる	I	9	7
		〇〇社では競技成績で役職が決まるのでそのために競技をするアスリートがいることは危険	G		
		報酬としての地位や権力はリスクになる	C		
		海外であるように家や地位がかかれば危ないアスリートもいるかもしれない	J		
		社会的地位などはもしかしたらそういう道にいく可能性もある	L		
	アスリート教育の不備	今のアンチ・ドーピング教育で具体例がでてこないのはリスクになる	E	44	12
		教育研修は制裁のことだけでなく薬の副作用などについても教えるべき	D		
		教育研修は数ではなくて個人にしっかり知識を与えないといけない	E		
		小さいころからドーピングの実際がわかる教育をするべき	G		
		研修内容にドーピングの実際の話がないのはリスクになる	J		
	アスリートライフ教育の不備	小さいころからのモラル教育が十分でないリスクになる	B	17	7
		ドーピングには道徳・社会・教育といったものが絡んでいることを認識するべき	C		
		勝つことだけがアスリートのアイデンティティではないことを教えないと危ない	D		
		アスリートとして必要な教育をするべき	J		
		アンチ・ドーピングの意味を考えるのはセカンドキャリアにつもつなげるけど教育は不十分	H		
	ドーピング検査の対象にならない可能性	ドーピング検査の時期がわかれば少し前に使用を止めてやればと言う気持ちになるかもしれない	C	7	3
		ドーピング検査の対象になっていない競技会だとわかると大丈夫だと思ってしまう	A		
		ドーピング検査の対象にならないとわかったらドーピングする気になるかもしれない	D		
		ドーピング検査のない地域の競技会でドーピングを考える場合もある	A		
		競技力が低下してドーピング検査対象にならなそうな時にそういう気持ちになる	C		
	摘発されないアスリート	強いアスリートがドーピングしていて捕まらなかったら薬を使うかもしれない	D	13	7
		誰にも分らないし条件がそろったら手をだしたいという気持ちが一切ないことはない	A		
		ドーピングしているけれどばれていないアスリートがいれば自分もいけると思う	J		
		ドーピングしているアスリートがいつも捕まらないと麻痺してくる	H		
		ドーピング検査だと捕まらないレベルだと思うと考える	E		
	社会規範	単に規則を駄目だから守るではなく自分の意思として固定されていないと危険	C	21	9
		周りの目があるからルールは守っているけど本当に駄目だと思っていないところは危ない	I		
		何んでもかを考えずにただルールに従うのは危険なこともある	G		
		しちやいけない駄目ばかりでなぜしてはいけないかという議論がないことが危ない	H		
		周りから悪く思われるのが嫌だからしなだけで実際はドーピングのことをしっかり考えていないのはどうか	L		
	集団主義	みんなが言っていることに従うというのは日本人の認識の甘いところ	C	12	7
		日本人の流されやすいところは危ない	D		
		日本人は駄目だとわかっていても人に流されてノーと言えないところが危険	K		
		みんな一緒だからというような考えは危険性がある	J		
		集団だから大丈夫という考え方は危ない	L		
	競技成績のノルマ	勝手にメダル目標を決めて取れなければ何か言う人はどうか	H	48	12
		強化の補助金の受給があつてメダルがとれなかったことを考えるとプレッシャーになる	B		
		強化費の支援を受けているというプレッシャーはある	C		
		〇〇社や〇〇社は怪我しても常に結果を出せないと打ち切られる世界なのでリスクになる	D		
		競技成績のノルマは自分を追い込むことになるから危険	J		
	不安を抱かせる競技スポーツシステム	〇〇競技のことしか考えていない生活だった	B	35	12
		競技に集中しなければパフォーマンスは上がらないけどその分危険性も高まるのは矛盾している	G		
		子どものころから競技だけの生活は危険	C		
		ジュニアから競技だけの生活は1つの原因になる	E		
		競技に専念してくるとキャリアに多様性を持たないことがリスクになる	H		
	不安定なキャリア	セカンドキャリアの関係でドーピングということもあり得る	C	31	12
		プロアスリートであれば辞めるか辞めないかの瀬戸際が危ない	D		
		セカンドキャリアのために競技成績をださないといけないというのも要因になる	E		
		競技成績や国際大会出場で名前を売ることでキャリアを高めることが求められる	A		
		現役中に競技結果にセカンドキャリアが左右されるような環境にいてはいけない	K		
	日常的な疲労回復の必要性	過度なトレーニング量をこなして毎日の疲労回復を望むのは危険	C	22	6
		寝て起きたらリハビリでできているものがあつたら本当に欲しい	I		
		アスリートは疲れをいかにとってパフォーマンスを上げるかが課題だからドーピングをする	H		
		疲労があるとサプリメントのようにわかっていて禁止物質を使う場合もあるかもしれない	G		
		寝て起きたらイメージだと悪く思わないからそういう思考に走る	E		
	禁止物質等の乏少な情報	1ヶ月で抜けるから今飲んでも大丈夫みたいな聞いた話で片づけることも多いかもしれない	A	14	7
		ドーピングしても1ヶ月半後の競技会までは尿からでは大丈夫だと聞いている	C		
		禁止物質が入っていてパフォーマンス向上の効果があるサプリメントがうわさになっている	A		
		うその情報でも効くとかみづからないとかあれば使ってしまうこともあり得る	E		
		自分の状態が悪いと周りが気になって余計なことを知りたくなる	G		

表 2-3 テーマ及び意味単位の要約（コード）等一覧

	メインテーマ	サブテーマ	意味単位の要約（コード）の例	発言者	コード数	発言者数
社会環境的要因	禁止物質等の乏少な情報	禁止物質等の副作用の知識の不足	薬の副作用の知識がないことがリスク	J	9	7
			ドーピングは悪いものだということを知らないと駄目だ	G		
			薬の副作用の苦しみなどを知らないのはリスク	B		
			薬の副作用は知っていないと危ない	D		
			多くのアスリートは薬を使用した後のことまでは知らない	K		
	サプリメント摂取の慣習	ジュニア期からのサプリメントの摂取	自分の安心感のためにサプリメントを飲んででどんどんシフトチェンジするかもしれない	K	13	11
			ジュニア期からサプリメントに慣れるとそういうものがなくてはならなくなるのが一番駄目	H		
			サプリメントがお守り代わりに中毒みたいになったら危険	L		
			ジュニア期からのサプリメントに頼っていると危険な方向に行くこともある	I		
			ジュニア期からのサプリメントの依存はドーピングに陥ってしまうリスクになる	A		
		サプリメントのパフォーマンス向上を目的とした摂取	パフォーマンス向上の効果があるサプリメントを使って強くなっている例がある	C	4	3
			サプリメントに頼って結果がでないともっと強力なものを求めるようになるので危険	K		
			サプリメントも競技力向上を求めたら禁止表に入っていないだけでドーピングと同じと理解しないと危ない	A		
			純粋な栄養補助ではなくて何か上げたいがために飲んでいる	A		
			一番のプレッシャーはオリンピック最終予選だった	K		
状況的要因	重要な競技大会	国際競技大会代表予選会でのプレッシャー	〇〇競技ではオリンピック選考のプレッシャーから典型的なことが起きている	B	19	11
			ステップアップになる競技会は追い詰められると危ない	D		
			一発の選考になると体調崩したり痛みを感じたりしたらわらにもすがる思いで何とかしたいと思う	G		
			トップアスリートはオリンピックに出場するまで人に話せないことがいっぱいある	H		
			2度目のオリンピックでうまくいかず焦っていると可能性がある	G		
		2度目以降の国際競技大会へのチャレンジ	2度目のオリンピック挑戦はプレッシャーのかり方違う	K	13	8
			1回代表になれば次はさらに上がったところで期待されるのはプレッシャーになる	A		
			2度目のオリンピックに行ける対象になったのでプレッシャーですぐきつかった	J		
			メダリストで次も金メダルを期待されて誰にも相談できずお金もかかってくるときつい	H		
			期待からのプレッシャーでドーピングが脳裏をよぎるかもしれない	B		
	競技大会での外部からの過剰なプレッシャー	競技大会での外部からの過剰なプレッシャー	結果は頑張っているでもでない場合があるのに世間がそれを認識していないのが良くない	C	26	9
			自分とメディアの期待とのギャップで常に葛藤していた	L		
			メディアで知名度は上がるけど実力が伴わなくなると自信がなくなっていく	H		
			メディアのメダル獲得予想はアスリートのプレッシャーになる	D		
			チームスポーツはメンバー争いも生活がかかっている	F		
		試合出場の争い	試合前に怪我をしているけど試合にどうしても出場したい時にはあり得る	A	3	3
			監督に使ってもらいたい試合にでるために何としてでもと思う時がある	L		
			不調が続くとドーピングに目が向く場合もある	C		
			不調で落ち込んだ時にドーピングが多そうなイメージがある	E		
			スランプに陥った時は何かに頼りたくなることがすごいある感じがする	A		
	パフォーマンスの停滞・低下	パフォーマンスの停滞	スランプで何かを探していたらふとよぎるかもしれない	G	44	11
			競技結果はアップデートしなければ出続けないのにそれができていない時は危ない	H		
			加齢で練習量をこなせなくなるとお金をかけて簡単に強くなるようなことを考えるのもわかる	D		
			パフォーマンスは低下して辞めたいけど辞められないような時にありがち	B		
			ピークが過ぎたけれども再び代表に戻りたい時にもししたら考える	C		
		パフォーマンスの低下	パフォーマンスが落ちた時ドーピングしたら変わるかもしれないと確かに思ったことはある	J	14	9
			競技成績の大きな低下はメンタル的な心配がありリスクになる	H		
			恵まれたトレーニング環境がなくなった時は危険	B		
			今はNTCに入っていないのに依然と同様の結果を求められるのは厳しい	D		
			勝てない強化指定選手からすぐ落とされ金銭面のサポートにも影響して不安になる	E		
損傷	トレーニング支援の低下	トレーニング支援の低下	トレーニングの支援レベルが下がるとプライドが崩されるからリスクになる	H	37	12
			強化指定から外れたことによるトレーニング支援のギャップはすごい	K		
			自分を追い込んで怪我をしたりすればそれがドーピングの引き金になる	J		
			〇〇オリンピックが終わってから怪我が増えて何かに頼りたくなる時がある	I		
			怪我してパフォーマンスが下がってリハビリしても元に戻らない時は考えられる	A		
	損傷からの早期復帰	損傷からの早期復帰	怪我はつきものなので治るならドーピングを考えるアスリートもいるかもしれない	D	14	5
			プレッシャーの中で医師の処置の効き目が弱かったりすれば何かに手をだす可能性はある	G		
			痛みはすごいストレスだから薬になるものだったら使いたい	H		
			痛みからメンタルに影響してくると厳しい	H		
			怪我の治療が完全でなく痛みがあるような時はあり得る	E		
	痛みの解消	痛みの解消	体調崩したり痛みを感じている時は何とかしたくなるので気をつける必要がある	G	9	4
			痛みがなくなることをもって薬に頼ってしまうこともあるかもしれない	L		
			追い込まれる1つの要因に減量がある	C		
			昔のアスリートは減量で利尿剤を使っていた	D		
			減量中に熱がでて身体が動かなかった時には手をだすかもしれないと思った	E		
減量	減量	減量	きつい減量で薬を飲むの自分からしないでもない	K	8	5
			減量はきついので何か手取り早い方法が欲しい	I		
			〇〇競技や〇〇競技は体をつくるのでドーピングの効果はものすごくでる競技	C		
			〇〇競技だと筋力やスタミナがほしいしプラス競技成績が求められたりすれば可能性はある	E		
			技術を取得するためにも筋力が必要な時などに可能性がある	G		
筋肉増強	筋肉増強	筋肉増強	弱い足を強化するために筋肉増量ができるのならやりたい気持ちもわかる	J	9	5
			筋肉を大きくする時にはやっぱりあればいいのにと思う	I		

『痛みの解消』で構成された。

【減量】は、アスリートの競技活動における減量によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『減量』で構成された。本テーマには、アスリートの過去の利尿剤の使用に関する意味単位が含まれている。

【筋肉増強】は、アスリートの競技活動における筋肉増強によるドーピングの誘発に関連する意味単位が識別・集約された『筋肉増強』で構成された。

V 考 察

1. 個人的要因

個人的要因においては、先行研究で明らかにされている要因と同様の概念である【個人の非道徳的スタンス】【外発的動機づけ】【自我志向性】が抽出された。

本調査でのアンチ・ドーピング規則違反と認識しながら禁止物質を使用すると言う【個人の非道徳的スタンス】の抽出は、特筆すべき結果である。他のメインテーマにおける意味単位では各種のドーピング誘発要因によってドーピングを行う可能性があるとの認識がアスリートから示されているが、本テーマを構成するのは実際のドーピング行為である。我が国のアスリートの中には禁止物質等の意図的な使用を道徳的に悪い行為とは捉えていないアスリートが存在しているために、このような結果になったと考えられる。この事実は、我が国で起きているドーピングの多くが意図的ではないうっかりドーピングであるとの見解(浅川, 2011)を持つ関係者に対して警鐘を鳴らしていると言える。

アスリートは自身の経験から【外発的動機づけ】はドーピング誘発要因となる可能性があるとの認識している。Chantal et al. (2009)の研究では、禁止物質の使用者の動機づけは自己決定の度合いが小さい外発的動機づけであると実証されている。本テーマの抽出については、Chantal et al. (2009)の研究を支持する結果であると考えられる。Mallett and Hanrahan (2004)の研究では、

高い競技レベルのアスリートの動機づけは諸種みられ時間とともに変化するとされている。本研究でもアスリートは、競技スポーツでの様々な経験から前述のような認識を持つ可能性があると考えられる。自己決定理論の下位理論である有機的統合理論(Ryan and Dec, 2000)では、無機動機づけ、外発的動機づけ、内発的動機づけを連続体として捉えている。今後は外発的動機づけの4つの自己調整とドーピングの関連の研究により、さらなる検証が可能になると考えられる。

本研究のアスリートからは、【自我志向性】がドーピング誘発要因となる可能性があるとの認識が示された。Allen et al. (2015)の研究では、自我志向性とドーピング態度との関連を明らかにしている。本テーマの抽出は、Allen et al. (2015)の研究を支持していると言える。本研究のこのような結果は、前述のMallett and Hanrahan (2004)の研究で明らかなように高い競技レベルのアスリートの動機づけの持ち方からみれば、あり得ると考えられる。近年はスポーツにおける目標志向性に関する研究が推進されているため、ドーピング防止においても今後の当該分野のさらなる研究が期待される。

2. 社会環境的要因

社会環境的要因においては、先行研究で明らかにされている要因と同様の概念である【アントラージュ】【他のアスリートのドーピング】【ドーピング検査の限界】【サプリメント摂取の慣習】が抽出された。

アスリートは、指導者、競技団体関係者、親と言った【アントラージュ】をドーピング誘発要因になる可能性があるとの認識していた。指導者などがドーピング誘発要因となる場合があることは、Chan et al. (2014)などの研究でも明らかにされている。我が国の指導者なども諸外国の指導者などと同様に高い競技成績が求められている。加えて、指導者には経済的報酬や地位が懸かっている場合もあるため、先行研究と同様にアスリートは指導者などがドーピングを誘発する可能性があるとの認識していると考えられる。なお、

『指導者の言動』には多くのアスリートの発言から非常に多くの意味単位が識別・集約されている。『指導者の言動』は、アスリートに大きな影響を与える可能性があるかと推察できる。本研究では、政府及びスポーツ統括団体などから競技団体関係者、競技団体関係者から指導者、或いは所属先関係者から指導者にかかるプレッシャーの存在やアスリートに最も身近な指導者のみならず、競技団体関係者、所属先関係者からもアスリートに対する直接的なドーピングを誘発する言動に関連する意味単位が識別されている。先行研究では、このようなアスリートによる経験的データからアスリートを取り巻く関係者間のドーピングの誘発に係る重層的な関係がみられる研究は見当たらない。本研究における前述のような関係者間の関係性の識別は貴重な成果だと考えられる。

アスリートは【他のアスリートのドーピング】によってドーピングは誘発する可能性があるかと認識していた。先行研究でも競争相手のドーピングといった要因が明らかになっており、このようなドーピングはゲーム理論のいわゆる囚人のジレンマといわれる現象で説明される (Breivik, 1992; Haugen, 2004)。本研究でのアスリートの発言をみる限り、国際競技大会や諸外国でのトレーニングなどの中で、アスリートにはこの囚人のジレンマと同様の心理状態が見て取れる。このため、我が国のアスリートはドーピングが疑われるアスリートや競争相手のドーピングがドーピングを誘発する可能性があるかと認識していたと考えられる。アスリートは実際に諸外国のアスリートからドーピングを薦められていた。クラブ内や代表チーム内などで他のアスリートからドーピングを薦められたといった事実は先行研究でも明らかになっている (Lentillon-Kaestner and Carstairs, 2010)。しかし、本研究では、アスリートから他国のアスリートにドーピングを薦められていたとの事実が確認された。これは新たな発見であり注視すべき事実である。アスリートは諸外国に一定期間滞在する場合にはリスクがあるとも認識している。これは、我が国のアスリートが国内と諸外国とを比較した認識であると言えるが、このような認識は

先行研究では抽出されていない。今後我が国の場合は、関係者がこのような国内と諸外国とのリスクのギャップを十分理解して対策を講じる必要があると示唆された。

競技大会で明らかにドーピング検査の対象にならない、或いはドーピング検査が行われない競技大会があるなどの【ドーピング検査の限界】は、アスリートにとってはドーピング誘発要因になり得ると認識されていた。これは、ドーピング・コントロールに選ばれないアスリートを生む仕組みなどがドーピング誘発要因であると明らかにしている Overbye et al. (2013) などの研究を支持していると言える。先行研究の諸外国のアスリートと同様に我が国のアスリートも摘発されない一定の条件下ではドーピングに肯定的な態度をとる可能性があるため、このような認識を持っていると考えられる。なお、我が国に限らず、全てのアスリートを検査対象とする仕組の構築は財政的・物理的に困難である。今後は、インテリジェンス・テストの促進による抑止力の強化やさらなる教育啓発が求められる。

【不安を抱かせる競技スポーツシステム】は、アスリートにとってドーピングを誘発する可能性があるかと認識されていた。ベッテ・シマンク (2001) は、競技スポーツはそもそも不確実な活動で「確実に成績を出すということは原理的にはできない…これが選手にとって耐え難い重荷となる。…生活がかかってくると余計にそれは重荷になる。だからこそ、ドーピングはこの不確かさをできるだけ減じる行為として広がりがあるのである。」と分析している (ベッテ・シマンク, 2001, p139)。我が国では従来いわゆる企業スポーツという支援体制によって、競技成績に左右されず経済的にも安定した、且つセカンドキャリアが保障された雇用条件下で競技スポーツ活動が行われてきた。しかし、アスリートの発言からは近年は多様な契約により競技スポーツ活動が行われている実態が推察され、これが先行研究と類似するような競技スポーツシステムをつくりだしていると考えられる。Aubel and Ohl (2014) の研究では、不安な雇用条件などがドーピングの誘発要因である

と示唆している。本研究で把握された競技成績のノルマや厳格な査定が条件となるような雇用条件は、Aubel and Ohl (2014) の研究で明らかにされた不安な雇用条件とすることができ、加えて、アスリートは国やスポーツ統括団体が掲げるメダル獲得目標や強化費の助成などの政策的措置に言及している。これらは、アスリートの競技活動を義務的に動機づける可能性が示唆され、前述の【外発的動機づけ】に関連すると考えられる。この点は、本研究による新たな発見であり、今後はアンチ・ドーピング対策として考慮が必要だと考えられる。競技スポーツにおいては、ジュニア期から競技に専念しなければ国際級のアスリートとしての活躍は困難である。しかし、このために一般的な社会経験や知識を取得できない場合もあり、これがドーピングを誘発する可能性があると考えられる。アスリートは認識している。いわゆる早期の競技の特殊化がドーピング誘発要因であるという Hauw and Bilard (2012) の研究や競技スポーツへの固定化がリスクになると言うベッテ・シマンク (2001) の研究を支持していると考えられる。これらのジュニア期からの競技の専念は、この結果シニアのアスリートになっても不安定なキャリアを築く可能性がある。特にアスリートがセカンドキャリアを展望した時に高い競技結果が必要になるなどリスクが高まるとアスリートは認識している。これは、Lentillon-Kaestner and Carstairs (2010) などの研究を支持する結果であると言える。なお、『競技成績のノルマ』『ジュニアからの競技中心の生活』『不安定なキャリア』には、全てのアスリートから非常に多くの意味単位が識別・集約されている。これらは、前述のサブテーマがアスリートに大きな影響を与える可能性について示唆していると言える。アスリートは、諸外国のアスリートがトレーニングの疲労回復のためにドーピングを行う実態を知り、ドーピングの意味を理解したと言っている。これは、日常的な疲労がドーピングを誘発すると言っている Aubel and Ohl (2014) の研究でも明らかにされている。競技スポーツにおいて自らの能力と技術の限界に挑むアスリートにとって厳しいトレーニングは不可欠であり、これらに

伴う身体の疲労をどのように回復させるかは多くのアスリートにとって重要な課題である。このような競技スポーツの特性から、本研究においても先行研究と同様のリスクが認識されたと考えられる。アスリートは、疲労回復のためだと禁止物質の使用について罪悪感が軽減されると発言している。この点は先行研究では明らかにされてこなかった貴重な発見であり注視すべき点である。別のアスリートは、特に乳酸が溜まるような競技種目では疲労は特にリスクになると発言している。当該ドーピング誘発要因は競技種目の特殊性によりその影響度に差異があると推察される。

アスリートは、【サプリメント摂取の慣習】がドーピングを誘発する場合があると認識していた。これは Backhouse et al. (2013) などの研究を支持する結果である。先行研究では、早期からサプリメントを摂取する習慣はドーピングにつながる可能性が高まるというゲートウェイ理論として明らかにされている。ジュニア期からのサプリメントへの依存はドーピングに陥ってしまうリスクになり得るとアスリートはゲートウェイ理論自体を知らないまでも経験的に認識しているようであり、これが本研究で先行研究と同様の趣旨の意味単位が識別された理由であると考えられる。本研究では、実際にサプリメントの本来の機能である栄養補助という機能を超えてパフォーマンス向上を目的にサプリメントを使用している事例も報告されている。さらに前述のように【個人の非道徳的スタンス】では、既に禁止物質が含まれていることを知りながら、そのようなサプリメントを使用している事例も報告されている。これらから、サプリメントについては、うっかりドーピングだけではなく、抜本的な対策を講じる必要性が示唆された。

社会環境的要因においては、前述の先行研究の要因と同様の概念の他に【競技成績のインセンティブ制度】【アスリート教育の不備】【社会規範】【禁止物質等の乏少な情報】が抽出された。

アスリートは報奨金や地位などを付与する【競技成績のインセンティブ制度】については、ドーピングを誘発する可能性があるとの認識を持って

いた。Bloodworth and McNamee (2010) などの研究では、経済的報酬という要因が明らかになっているが、本研究のアスリートの場合は制度に着目している点が特徴的である。我が国では近年に高額な当該制度が設立されたため^{注2)}、アスリートが先行研究とは違い制度自体に関する考えを発言したと推察できる。このような制度は、【外発的動機づけ】でのアスリートの意味単位をみる限り、アスリートの外発的動機づけでの競技活動に影響すると考えられる。

我が国のアンチ・ドーピング教育は、いわゆるうっかりドーピングに対する知識の習得には一定の貢献をしてきた。これは、アンチ・ドーピング規則違反統計や本研究のアスリートの意味単位から理解できる。しかし、アスリートは、現行の教育研修は意図的ドーピングに対する具体的かつリアルな内容を提供していないと言った【アスリート教育の不備】がリスクになると認識していた。国際レベルのアスリートになれば、前述のように【他のアスリートのドーピング】などの影響を受ける。しかし、アスリートの経験上、教育研修は何度も受講してはいるが、現実には認識しているドーピング誘発要因に対処できる知見がこれまでの教育研修では身に付けられないというジレンマから、【アスリート教育の不備】がドーピング誘発要因になり得ると言う認識を持っていると見て取れる。特に『アンチ・ドーピング教育の不備』に関連した意味単位が全てのアスリートから非常に多く識別・集約されている結果からも、アスリートの不安や不満が示唆される。加えて、アスリートは一般的なアンチ・ドーピング教育だけでは、アスリートのあり方などについては教育が限定的であると言った認識も持っている。Hanson (2009), Hauw (2017) の研究で主張されているようにアスリートのライフスタイルを捉えた教育の必要性が示唆された。諸外国では既に実施されているアスリートのライフスタイル教育 (English Institute of Sport: EIS, 2019; High Performance Sport New Zealand: HPSNZ, 2019) が我が国では十分ではないと言った現状から、アスリートのこのような認識に至っていると推察できる。

アスリートは、【社会規範】がアスリートに影響があるという認識を持っていた。世間や身近な仲間によるドーピングに対する制裁は、ドーピングの抑止力になっていると言われている (Mazanov and Huybers, 2010)。しかし、アスリートはこのために単に規則を遵守するだけではリスクがあるとの認識を示すとともに、集団主義による態度や行動についてもリスクと捉えている。アスリートは、前述のような複数のドーピング誘発要因による影響を経験してきたからこそ、規則を遵守するだけに重きが置かれ本質的なドーピングの是非への理解などが軽視されることや自身での判断を放棄しているような態度や行動への危惧を抱いていると考えられる。

アスリートは【禁止物質等の乏少な情報】がドーピングを誘発する場合があると認識していた。先行研究では、禁止物質等の入手環境がドーピング誘発要因の1つであると明らかにされている。しかし、我が国の場合は禁止物質等の入手機会が身近に多くあるとは考えにくい (日比野ほか, 2016)。これらはドーピングの抑止となる反面、本研究ではアスリートの一部に禁止物質等の不確かな情報が出回り、これらが場合によってはリスクになっていることがわかる。加えて、アスリートには禁止物質等を使用する怖さなども理解されておらず、副作用などの知識の不足がリスクになると認識されていた。先行研究でも禁止薬物等の副作用が抑止力になると明らかにされている (Chan et al., 2014)。我が国のアスリートも副作用には抑止力があると考えているため、禁止薬物による健康被害などの知識の不足がリスクであるとの意見を持っていると考えられる。これらからは、アスリートが正しい知識を習得できるように教育研修を改善する必要性が見て取れる。

社会環境的要因全体について考察すれば、社会環境的要因の【アントラージュ】【競技成績のインセンティブ制度】【アスリート教育の不備】【不安を抱かせる競技スポーツシステム】は、個人的要因の【外発的動機づけ】【自我志向性】に影響を与える可能性が推察される。既に述べているような【競技成績のインセンティブ制度】の『高額

な報奨金の付与制度』が【外発的動機づけ】の『報酬に動機づけられた競技活動』に、【不安を抱かせる競技スポーツシステム】の『競技成績のノルマ』が【外発的動機づけ】の『義務的に動機づけられた競技活動』に影響を与えるだけでなく、例えば、【アントラージュ】の『指導者の言動』が【自我志向性】の『勝利だけを求める姿勢』に^{注3)}、また『NF・所属先関係者の言動』が【外発的動機づけ】の『義務的に動機づけられた競技活動』に^{注4)}影響を与える可能性や【不安を抱かせる競技スポーツシステム】の『不安定なキャリア』が【外発的動機づけ】の『義務的に動機づけられた競技活動』に^{注5)}影響を与える可能性も考えられる。このほか社会環境的要因の中でも要因間の影響を推察できる。【アスリート教育の不備】の『アンチ・ドーピング教育の不備』が【禁止物質等の乏少な情報】の『禁止物質等の副作用の知識の不足』に影響を与えるのは前述のとおりであるが、例えば、【アントラージュ】の『指導者等のアンチ・ドーピング意識の低さ』『指導者の言動』が【サプリメント摂取の慣習】の『ジュニア期からのサプリメントの摂取』に^{注6)}影響を与える可能性や、【禁止物質等の乏少な情報】の『禁止物質等の不確かな情報』が【サプリメント摂取の慣習】の『サプリメントのパフォーマンス向上を目的とした摂取』に^{注7)}影響を与える可能性も考えられる。このような要因間の影響の可能性からは、先行研究で明らかにされている、ドーピングは個人的要因のみならず社会的な影響によって起きていると言った構造（ベッテ・シマンク、2001）やアスリートと関係者がつくりあげる複雑な形態—フィギュレーション（ヴォディンガトン・スミス、2014）について垣間見ることができるとともに、これらは実際のドーピングのメカニズムの解明の困難さをも助長させた。

3. 状況的要因

状況的要因では、先行研究の要因と同様の概念である【重要な競技大会】【パフォーマンスの停滞・低下】【トレーニング支援の低下】【損傷】【減量】【筋肉増量】が抽出された。

アスリートにとって【重要な競技大会】は、ドーピングを誘発する可能性があるという認識されていた。Berbecaru et. al (2014)などの研究では、重要な競技大会がドーピングを誘発すると示唆している。本研究では、特にオリンピック競技大会などの本大会よりも日本代表を決定する予選会でのプレッシャーがリスクになると示唆された。一方、2度目以降のオリンピック競技大会などへの挑戦は大きなプレッシャー・ポイントであると明らかにされた。これは、先行研究では明らかにされてこなかった。経験したアスリートが限定的であるためにこれまで注目されてこなかったと推察できるが、今後は2度目以降のオリンピック競技大会などに挑戦するアスリートにも注視する必要があると考えられる。

アスリートは、【パフォーマンスの停滞・低下】がドーピングを誘発する可能性があるという認識を持っていた。パフォーマンスの停滞が続く時のドーピングの可能性については、Overbye et al. (2013)の研究でも明らかになっている。本研究では、特に一定の競技成績を挙げたアスリートがピーク時よりパフォーマンスが低下した時に再び高いレベルに戻りたい、若しくは今の競技成績のままでは辞められない時などにリスクが高まる可能性があるという示唆された。なお、『パフォーマンスの停滞』には、多くのアスリートから非常に多くの意味単位が識別・集約されている。これらからは、『パフォーマンスの停滞』がアスリートに大きな影響を与える可能性が推察できる。

【トレーニング支援の低下】は、アスリートにとって大きな影響を与えることが示唆された。これは、Mazanov et al. (2011)などの研究で明らかにされた資金的及び非資金的支援が不安定な時にドーピングへの脆弱性は増幅するといった研究結果からも理解できる。本研究では、アスリートは強化指定から外れナショナルトレーニングセンターの使用が不可になったり、スポーツ医科学支援や個人助成が打ち切られたりする支援の変化は国際競技大会で表彰台を目指すアスリートにとって追い込まれることにつながると発言しており、このためアスリートは【トレーニング支援の低下】

がドーピングを誘発するという認識を示していると考えられる。

アスリートは、【損傷】がドーピングを誘発する可能性があるという認識を持っていた。これは、損傷後に早期に復帰する必要がある時や損傷が思うように回復しない時などはドーピングを誘発すると言う Bloodworth and McNamee (2010) などの研究を支持していると言える。アスリートは、復帰までに時間が限定される時などにこのような認識を持つと考えられる。加えて、損傷には痛みを伴う場合があるが、本研究では痛みの解消の必要がある時のリスクが示唆された。これは先行研究では明らかにされてこなかった点であり注視すべきであると考えられる。痛みに関する意味単位は、ほとんどが女性のアスリートからの識別であった。痛みの感受性については、男女差がある可能性が推察される(深井ほか, 1997)。

アスリートは、【減量】がドーピングを誘発する可能性があるという認識を持っていた。減量を保証する禁止薬物を使用する可能性については、Overbye et al. (2013) の研究でも明らかになっている。しかし、実際に【減量】がドーピング誘発要因になるかどうかは、競技種目や個人の特性によると考えられる。アスリートが体重コントロールを必要としている場合には考慮が必要であると言える。

アスリートは、【筋肉増強】が必要な時にドーピングを誘発する可能性があるという認識を持っていた。筋肉増強の効果がある禁止薬物を使用する可能性については、Overbye et al.(2013) などの研究でも明らかになっている。【筋肉増強】が優位性の確保から有効であるような競技種目において筋肉増強の必要性に迫られた時は、アスリートはこのような認識を持つと考えられる。

状況的要因全体について考察すれば、まず、状況的要因の全てのテーマは個人的要因、社会環境的要因に影響を与える可能性があると考えられる。言い換えればアスリートの状況によってドーピングの誘発の程度が変わりリスクも変わると考えられる。社会環境的要因と同様に状況的要因の中でも要因間の影響が推察される。例えば、【重

要な競技大会】の『国際競技大会代表予選会でのプレッシャー』が【損傷】の『損傷からの早期復帰』に^(注8)、【パフォーマンスの停滞・低下】の『パフォーマンスの低下』が【筋肉増強】の『筋肉増強』に^(注9) 影響を与える可能性などその他多数の可能性があると推察される。

以上から、アスリート個人を焦点化するだけではなく、社会環境的要因、状況的要因を捉えたドーピングの未然防止の重要性が示唆されたと考えられる。

VI 結 論

本論では、我が国のアスリートが認識しているドーピング誘発要因を明らかにしようとした。テーマ分析法により【個人の非道徳的スタンス】【外発的動機づけ】などの3つの個人的要因、【アントラージュ】【他のアスリートのドーピング】などの9つの社会環境的要因、【重要な競技大会】【パフォーマンスの停滞・低下】などの6つの状況的要因が抽出された。アスリートに直接アプローチする研究が希少である我が国において、はじめてアスリートのドーピング誘発要因の認識を明らかにした本論の研究成果は意義を有すると考えられる。アスリートが認識しているドーピング誘発要因を明らかにした研究成果は、ドーピングの未然防止のための有益な情報を提供したと言える。加えて、個人的・社会環境的・状況的要因間の影響や各々の要因内での要因間の影響の可能性などからは実際のドーピングの複雑さが示唆され当該研究の発展に貢献したと考えられる。

本論は、アスリートのドーピング誘発要因の認識を捉えた研究であり、アスリートのドーピングの信念、態度、行動の実態を捉え実証した研究ではない。この点については、本論の成果を踏まえたうえで今後の課題としたい。

注

注1) 本調査の対象者については、競技名の記載により個人が特定される恐れがあるため、個人・集団競技の別、性別のみの記載としている。

- 注2) 日本実業団陸上競技連合は、2016年にマラソン日本記録更新者に1億円の報奨金を授与する制度を創設している。
- 注3) アスリートからは「指導者が勝つことだけを求めるのは良くない」と言った意味単位が識別されている（サブテーマ：指導者の言動）。
- 注4) アスリートからは「上が掲げた目標はNFから下に降りて最後はアスリートにくる」と言った意味単位が識別されている（サブテーマ：NF・所属先関係者の言動）。
- 注5) アスリートからは「セカンドキャリアのために競技成績をださないといけないというのも要因になる」と言った意味単位が識別されている（サブテーマ：不安定なキャリア）。
- 注6) アスリートからは「指導者が疲労回復のために多分大丈夫と言ってみたことないものを薦めてきた」と言った意味単位が識別されている（サブテーマ：指導者等のアンチ・ドーピング意識の低さ）。
- 注7) アスリートからは「禁止物質が入っていてパフォーマンス向上の効果があるサプリメントがうわさになっている」と言った意味単位が識別されている（サブテーマ：禁止物質等の不確かな情報）。
- 注8) アスリートからは「一発の選考になると体調崩したり痛みを感じたりしたらわらにもすがる思いで何とかしたいと思う」といった意味単位が識別されている（サブテーマ：国際競技大会代表予選会でのプレッシャー）。
- 注9) アスリートからは「パフォーマンスが低下してもドーピングすれば簡単に戻る」といった意味単位が識別されている（サブテーマ：パフォーマンスの低下）。

文 献

- 浅川伸 (2011) わが国におけるドーピング違反事例の実情と対策. YAKUGAKU ZASSHI, 131(12): 1755-1756.
- Allen, J., Taylor, J., Dimeo, P., Dixon, S., and Robinson, L. (2015) Predicting elite Scottish athletes' attitudes towards doping: examining the contribution of achievement goals and motivational climate. *Journal of sports sciences*, 33(9):899-906.
- Aubel, O. and Ohl, F. (2014) An alternative approach to the prevention of doping in cycling. *International Journal of Drug Policy*, 25(6): 1094-1102.
- Backhouse, S. H., Whitaker, L., and Petrczi, A. (2013) Gateway to doping? Supplement use in the context of preferred competitive situations, doping attitude, beliefs, and norms. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports*, 23(2): 244-252.
- Berbecaru, C. F., Stnescu, M., Vjial, G. E., and Epuran, M. (2014) Theoretical and methodological aspects on doping phenomenon in elite athletes. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 149:102-106.
- ベツテ・シマンク：木村真知子訳 (2001) ドーピングの社会学—近代競技スポーツの臨界点—。不味堂出版。
- Bloodworth, A. and McNamee, M. (2010) Clean Olympians? Doping and anti-doping: The views of talented young British athletes. *International journal of drug policy*, 21(4): 276-282.
- Braun, V. and Clarke, V. (2006) Using thematic analysis in psychology. *Qualitative Research in Psychology*, 3(2):77-101.
- Breivik, G. (1992) Doping games a game theoretical exploration of doping. *International Review for the Sociology of Sport*, 27(3): 235-253.
- Chan, D.K.C., Hardcastle, S.J., Lentillon-Kaestner, V., Donovan, R.J., Dimmock, J.A., and Hagger, M.S. (2014) Athletes' beliefs about and attitudes towards taking banned performance enhancing substances: A qualitative study. *Sport, Exercise, and Performance Psychology*, 3(4): 241-257.
- Chantal, Y., Soubranne, R., and Brunel, P. C. (2009) Exploring the social image of anabolic steroids users through motivation, sports personship orientations and aggression. *Scandinavian Journal of Medicine & Science in Sports*, 19(2): 228-234.
- De Bosscher, V., Bingham, J., Shibli, S., van Bottenburg, M., and De Knop, P. (2008) The global sporting arms race: An international comparative study on sports policy factors leading to international sporting success. Meyer & Meyer.
- Donovan, R.J., Eggar, G., Kapernick, V., and Mendoza, J. (2002) A conceptual framework for achieving performance enhancing drug compliance in sport. *Sports Medicine*, 32(4): 269-284.
- English Institute of Sport (2019) Performance Lifestyle support service. <https://www.eis2win.co.uk/expertise/performance>, (accessed 2019-02-01).
- Erickson, K., McKenna, J., and Backhouse, S. H. (2015) A qualitative analysis of the factors that protect athletes against doping in sport. *Psychology of Sport and Exercise*, 16, 149-155.
- 深井喜代子・小野和美・田中美穂・關戸啓子・新見明子 (1997) 痛みの感受性と痛み反応の性差及び人間関係の違いによる差. 川崎医療福祉学会誌, 7(1): 125-135.
- Funahashi, H., Nagamatsu, J., Shirai, K., Yamashita, S., Nakamura, H., Yamada, E., Waku, T., and Mano, Y. (2014) Success drivers in the Japanese elite sport system: An examination based on evaluations of the elite sport climate

- by elite athletes. *Asian Sports Management Review*, 7: 61-98.
- Funahashi, H., De Bosscher, V., and Mano, Y. (2015) Understanding public acceptance of elite sport policy in Japan: a structural equation modelling approach. *European Sport Management Quarterly*, 15(4):478-504.
- Gucciardi, D. F., Jalleh, G., and Donovan, R. J. (2011) An examination of the sport drug control model with elite Australian athletes. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 14(6):469-476.
- Guest, G., Bunce, A., and Johnson, L. (2006) How many interviews are enough? An experiment with data saturation and variability. *Field methods*, 18(1): 59-82.
- Hanson, J. (2009) Equipping athletes to make informed decisions about performance-enhancing drug use: A constructivist perspective from educational psychology. *Sport in Society*, 12: 394-410.
- Haugen, Kjetil K. (2004) The performance-enhancing drug game. *Journal of sports economics* 5, 1: 67-86.
- Hauw, D. and Bilard, J. (2012) Situated activity analysis of elite track and field athletes' use of prohibited performance-enhancing substances. *Journal of Substance Use*, 17(2): 183-197.
- Hauw, D. and Mohamed, S. (2015) Patterns in the situated activity of substance use in the careers of elite doping athletes. *Psychology of Sport and Exercise*.
- Hauw, D. (2017) Antidoping education using a lifelong situated activity-based approach: evidence, conception, and challenges. *Quest*, 69(2): 256-275.
- 日比野幹生・舟橋弘晃・青柳健隆・間野義之 (2016) アスリートがドーピングを行わなかったことに影響した要因: オリンピックメダリストを対象とした質的検証. *スポーツ産業学研究*, 26(1) : 13-28.
- High Performance Sport New Zealand (2019) The athlete life programme. <https://hpsnz.org.nz/resources/athlete-life>, (accessed 2019-02-01).
- Jalleh, G., Donovan, R. J., and Jobling, I. (2014) Predicting attitude towards performance enhancing substance use: A comprehensive test of the sport drug control model with elite Australian athletes. *Journal of science and medicine in sport*, 17(6): 574-579.
- Kondric, M., Sekulic, D., Uljevic, O., Gabrilo, G., and Zvan, M. (2013) Sport nutrition and doping in tennis: An analysis of athletes' attitudes and knowledge. *Journal of Sports Science and Medicine*, 12: 290-297.
- Lentillon-Kaestner, V. and Carstairs, C. (2010) Doping use among young elite cyclists: a qualitative psychosociological approach. *Scandinavian Journal of Medicine and Science in Sports*, 20(2): 336-345.
- Mallett, C. J. and Hanrahan, S. J. (2004) Elite athletes: why does the 'fire' burn so brightly?. *Psychology of sport and exercise*, 5(2): 183-200.
- Mazanov, J. and Huybers, T. (2010) An empirical model of athlete decisions to use performance-enhancing drugs: qualitative evidence. *Qualitative Research in Sport and Exercise*, 2(3): 385-402.
- Mazanov, J., Huybers, T. and Connor, J. (2011) Qualitative evidence of a primary intervention point for elite athlete doping. *Journal of Science and Medicine in Sport*, 14(2): 106-110.
- メリアム：堀薫夫ほか訳 (2004) 質的調査法入門：教育における調査法とケース・スタディ. ミネルヴァ書房.
- Morente-Sánchez, J. and Zabala, M. (2013) Doping in sport: a review of elite athletes' attitudes, beliefs, and knowledge. *Sports medicine*, 43(6): 395-411.
- 日本アンチ・ドーピング機構 (2017), 2017-004事件同意決定書. https://www.playtruejapan.org/org/upload_files/uploads/2018/01/2017-004.pdf, (参照日 2018 年 12 月 10 日).
- 大野晃 (1996) 現代スポーツ批判：スポーツ報道最前線からのレポート. 大修館書店.
- Overbye, M., Knudsen, M.L., and Pfister, G. (2013) To dope or not to dope: Elite athletes' perceptions of doping deterrents and incentives. *Performance Enhancement and Health*, 2(3): 119-134.
- Petróczi, A. and Aidman, E. (2008) Psychological drivers in doping: The life-cycle model of performance enhancement. *Substance Abuse Treatment, Prevention & Policy*, 3: 1-12.
- Pitsch, W. and Emrich, E. (2011) The frequency of doping in elite sport: Results of a replication study. *International Review for the Sociology of Sport*, 45(5): 559-580.
- リチャーズ・モース：小林奈美監訳 (2008) はじめて学ぶ質的研究. 医歯薬出版.
- Ryan, R.M. and Dec, E.L. (2000) Intrinsic and extrinsic motivations: Classic definitions and new directions. *Contemporary Educational Psychology*, 25: 54-67.
- Strelan, P. and Boeckmann, R. (2006) Why drug testing in elite sport does not work: Perceptual deterrence theory and the role of personal moral beliefs. *Journal of Applied Social Psychology*, 36(12): 2909-2934.
- ヴォディングトン・スミス：大平章ほか訳 (2014) スポーツと薬物の社会学—現状とその歴史的背景. 彩流社.

(2019 年 5 月 21 日受付)
(2019 年 12 月 26 日受理)